

# カポーティ小説の詩的特質

## 音象徴との関連 (1)

大 園 弘

### 序

筆者は、トルーマン・カポーティの小説(散文)が詩的に感じられる要因の一つに押韻が深く関わっており、押韻によって創出されるリズムやテンポなどの音楽的要素が彼の散文に詩的な雰囲気を帯びさせているということを『カポーティ小説の詩的特質 音と文彩』<sup>1</sup>「カポーティ小説における押韻形式の多様性」などの論考において例証した。<sup>(1)</sup>

本稿では、これらの論考同様、カポーティの小説(散文)の詩的特質とその効果について、若干の考察を試みたい。考察対象は前稿までに取り上げた、押韻が確認できる事例である。だが、本稿が目指すのは、押韻による詩的效果ではなく、それらの事例における音象徴(sound symbolism)の側面である。

音象徴とは、ある特定の語根が持つ音が、特定の意味やイメージを喚起する事象のことをさす。/mal/と/mil/とでは、どちらが大きな(小さな)テーブルのイメージであるかを被験者に問う実験から、アルファベットの[a]が[i]よりも大きい音感をもつことを明らかにした Sapir の研究(1929)以降、音象徴への関心はさまざまな分野の研究者のあいだで途絶えることなく現在に至っている。「音象徴」はオノマトペ(onomatopoeia)とも関連が深く、豊富なオノマトペの事例を有する日本語においても、音象徴に関する示唆に富む研究がおこなわれてきたことは周知の事実である。最近では、音象徴が言語の違いを越え

る普遍的な事象であることを指摘する研究報告も散見でき、<sup>(2)</sup> なかでも、日本語の音象徴を論じた浜野の研究成果(2014)は、英語の音象徴を考察するうえでも示唆に富む。

よって本稿では、主として浜野の仮説に依拠し、筆者がこれまでに考察対象としてきた数事例に対して、音象徴の観点からそれらの事例の詩的效果を考察する。いくつかの音素の象徴的イメージもまた、カポーティの小説(散文)を詩的に響かせる要因の一つであることを明らかにすることが、本稿の目的である。

## 1. 考察対象とする事例

本稿では下掲の事例を考察の対象とする。本事例は“ A Christmas Memory ”(「クリスマスの思い出」1956)からの引用であるが、『カポーティ小説の詩的特質』の第1章でも取り上げた。

The candle burns too short to hold. Out it goes, exposing the starlight, the stars spinning at the window like a visible caroling that slowly, slowly daybreak silences. Possibly we doze; but the beginnings of dawn splash us like cold water: we're up, wide-eyed and wandering while we wait for others to waken.

「蠟燭は燃え、持っていられなくなるくらい短くなる。蠟燭の火は消え、星明りがひととき輝きを増す。まるでクリスマスキャロルが星の姿で現われたかのように、星は窓辺でくるくる踊り、やがて夜明けが近づくにつれ、その姿は消えていく。多分ぼくたちはうたた寝をしたのだ。だが、夜明けの最初の日の光が冷水を浴びせたようにぼくたちの目をさます。ぼくたちは大きく目を見開き、ぶらぶらしながら他の人たちが起きてくるのを待ちうける。(拙訳)

“ A Christmas Memory ” は、カポーティの自伝的な作品である。彼は5歳の夏

から9歳の夏までの約4年間をアラバマ州モンローヴィルにある母方の親戚宅(フォーク家)で両親と離れて暮らした。毎年11月を迎えると、彼は年の離れた老婆スック(Sook)と二人でクリスマスの準備に取りかかった。この物語は、作者の分身である「ぼく(=Buddy)」がスック 物語のなかでは“my friend” / “she”と紹介されている とのクリスマスの季節の楽しい思い出を綴ったものである。上の引用文は、クリスマス・イブの晩、興奮のあまり寝つけない「ぼく」と「彼女(=ぼくの友だち)」が「ぼく」の寝室で静かに過ごしているうちにうたた寝をし、夜明けと同時に目をさまし、家人が起きてくるのを待っている様子を描いた場面からの引用である。<sup>(3)</sup>

## 2. 考察対象とする語根/s/, /spl/, /w/

『言語学百科事典』によると、英語には音象徴に関して音声的に分類できる単語がかなりあり、それらは語頭子音、母音、語末子音に分類することができる。<sup>(4)</sup> 本稿では上掲の引用文中の語頭子音/s/, /spl/, /w/の3つの語頭子音に注目する。<sup>(5)</sup> この一節は3つのセンテンスから構成されている。各センテンスの文頭に番号( ~ )を付し、考察対象とする語根/s/, /spl/, /w/に修飾(ボールド、イタリック及びアンダーライン)を施したものが以下の英文である。

- ①The candle burns too short to hold. ②Out it goes, exposing the starlight, the stars spinning at the window like a visible caroling that slowly, slowly daybreak silences.  
③Possibly we doze; but the beginnings of dawn splash us like cold water: we're up, wide-eyed and wandering while we wait for others to waken.

### 3. 考察1 : /s/

筆者は『カポティ小説の詩的特質』のなかで以下のように述べた。

「②には(中略)子音“s”[s]による頭韻“starlight”“stars”“spinning”  
“slowly”“silences”が含まれている。(中略)starlight”“stars”“spinning”  
“slowly”“silences”、これら5つの単語が組み合わさることにより醸し出され  
るイメージは、聖夜の「静けさ(silence / serenity)」である。窓辺で「くるくると  
踊る(“spinning”)」星々のきらめきには「音(sound)」は伴っておらず、漆黒の天  
空に浮かぶそのきらめきは、聖なる静けさを強調してもいる。カポティは、  
このようなイメージを子音“s”[s]の頭韻により、効果的に演出しているよ  
うに思われる。」<sup>(6)</sup>

前著でこう述べたとき、筆者は場面の「静けさ」を醸し出すための工夫として  
なぜ/s/の語頭子音が用いられたのかという点については深く考えてはいな  
かった。ただ感覚的に/s/音の連続に特別の根拠もなく「静けさ」を感じ取っ  
ていたにすぎなかった。だが、音象徴に関する諸説によると、/s/は本来「静け  
さ」のイメージを帯びる語頭子音のようである。

/s/は日本語では、濁音に対して清音に分類される音素である。英語では有  
声阻害音に対する無声阻害音に相当する。濁音(有声阻害音) /g/, /z/, /b/, /d/  
に対応する清音(無声阻害音)が/k/, /s/, /p/, /t/である。これら清音(無声阻害  
音)、濁音(有声阻害音)が喚起するイメージについて、鈴木は「清音が濁音と比  
べて、たとえば明快、微細、軽少であり、濁音が粗大、強力、時には不快です  
らあるということは、諸家の説をまたずとも我々日本人なら誰でも可成りはっ  
きりした実感として意識されているものである」<sup>(7)</sup>と述べ、/s/と/z/について  
は、次のような名詞と動詞の例を挙げている。

名詞 / sama / (様、様子)	/ zama / (ザマ、「あのザマを見ろ」)
動詞 / suru / (擦る)	/ zuru / (ズル[自動車などが止めてもなお動くこと])
/ sureru / (擦れる)	/ zureru / (ズれる[喰違う]ズレ[を感じた])

浜野も鈴木と似通った見方をしている。「有声阻害音は、対応する無声阻害音に比べて、運動の力や物の質量が大きいことを意味する」、「比喻による意味の拡張の過程を通して、有声阻害音の 重さ、強さ という意味は、粗さに拡張し、さらに 不完全さ という意味を持つようである」、また、「重さは 不快さ にもつながるようである」と述べている。そのうえで、/z/ではじまる語が「粗い粒子が動くこと」を意味する一方で、/s/を語頭とする語は「抵抗のない表面を滑る様子、順調さ、滑らかな運動などを示すことが多いと説明し、/s/には軽さ、小ささ、細かさ、静けさのイメージが伴うとしている。<sup>(8)</sup>確かに、「さらさら」・「ざらざら」/「しっとり」・「じっとり」/「そっと」・「ぞっと」などの対応関係が即座に思い浮かぶ。

このように、語頭の子音/s/には言語の違いを越えて、「静けさ」のイメージが本来的に備わっている<sup>(9)</sup>。上掲の引用文の①と②を貫く基調は「静寂」である。“starlight”以下5つの単語は単に意味の上で「静けさ」のイメージを帯びているというだけではなく、/s/の音を連続させることで音響面でも「静けさ」の雰囲気を醸し出している。そしてこのことが上掲の引用文を詩的に響かせる要因になってもいるようである。筆者が②の英文に「感覚的に/s/音の連続に特別な根拠もなく 静けさ を感じ」たのも、語頭子音/s/のこのような音象徴によるものであると考えられる。

この音象徴による/s/の静けさのイメージは、日本語訳では伝わってこない。しかし、数々の研究が示唆するように、異なる言語間で特定の音韻が同一のイメージを引き起こすという音象徴の普遍性が認められるのであれば、日本語を

母語とする読者であっても、原文で読む限り、上の引用文(②)から「静けさ」のイメージを感じ取ることはできるであろう。

以下、/s/による同様の効果が認められる事例を *Other Voices, Other Rooms* (1948) から 2 例( A・B )挙げておきたい。

[ A ].., and Idabel's voice, speaking now, sounded soft, and snow-hushed: .... (*Other Voices, Other Rooms*)

「・・・そして、話しかけてきたアイダベルの声は、やさしく、雪のように静かに響いてきた・・・。(拙訳)<sup>10)</sup>

[ B ]Behind the foliage, a bull-toned voice, and another, this like a guitar, blended as raindrops caress to sound a same rhythm; an intricate wind of rustling murmurs, small laughter followed sighs not sad and silences deeper than space. (*Other Voices, Other Rooms* p.187.)

「木立の向うから、雄牛のような声に続いてもう一つ声が聞こえてきた。こちらはギターのような声で、雨雫の愛撫のように調和して同じリズムを刻んでいた。入り組んだ風のような密かな囁き声と小さな笑い声が、悲しみとは異なるため息と、空間よりも深い静けさのあとに続いて聞こえてきた。(拙訳)

#### 4 . 考察 2 : /spl/

次に語頭子音群/spl/に注目したい。③の引用文である。③では場面が一変する。聖夜の「静けさ(silence / serenity)」は、夜明けとともに過ぎ去り、クリスマス当日の朝を迎えた「ぼく」と「彼女」のワクワクした様子 = 気持ちが表現されている。

③Possibly we doze; but the beginnings of dawn splash us like cold water: we're up, wide-eyed and wandering while we wait for others to waken.

③には/spl/の子音群を含む単語は“ splash ” 1語のみであるために押韻は成立していないが、/spl/の音象徴と文脈との間には密接な関係がありそうである。

井上は、語頭の/s/が「語頭子音結合として、‘ str- , spr- , spl- ’のように、3子音結合を生じる唯一の先頭子音である」とし、/spr-/を例に取り、「内部から外部への経路を通して、勢いよく噴出 する感じがする」と述べたうえで、/spr-/のこうしたイメージが「調音時における口の前方部で‘ spr- ’の調音のための口構えで、肺から押し出される気流を勢いよく噴出させるメカニズム、筋力感覚的にも、うまく対応している」ことにより生じていると指摘している。<sup>(11)</sup>

これは/spl-/ではじまる単語にも当てはまるようである。/spl-/を語頭子音群とする次の単語には、外へ向かって勢いよく噴出するイメージが感じ取れるし、“ splash ” も同類である。

splatte(動): 水・泥などを はねかける / 悪口などを 浴びせる。

splay(動): ~を広げる / 広がる。

splendi(形): 輝かしい / 華麗な。

splurge(動): 散財する / みせびらかす。

splutter(動): 早口でしゃべる。

“ splash ”(「顔に水をはねかける」)は、②の5つの単語と同じく/s/ではじまるが、「静けさ」とは対照的に、人の動作とその動作によって起こる(水しぶきの)音のイメージを伝えている。それによって、夜明け前の「静けさ」が過ぎ去り、クリスマス当日の朝を迎えた「ぼく」たちのワクワクした気持ちのみならず、新たな場面(=朝を迎えたこと)への展開を伝えているように感じられる。

カポータィはこのように/s/と/spl/の音象徴の対照的な語感を活用し、場面と時間の急展開を巧みに表現している。

## 5 . 考察 3 : /w/

さて、引き続き③の文である。この一文には、やや離れた位置にある文頭から2語目の“(Possibly) we”を除いても、半母音“w”[w]による頭韻が8語も用いられている(“water” “we’re” “wide-eyed” “wandering” “while” “we” “wait” “waken”)。しかも、それらの単語は、ほぼ間を置かず、畳みかけるように配置されている。<sup>(12)</sup>

“...water: we’re up, wide-eyed and wandering while we wait for others to waken.”

では、/w/はどのような音象徴を持つのであろうか。浜野は「頭が/w/または母音の CV タイプの語根は、動物や人間の感情的な大声を表す」<sup>(13)</sup>とし、CV の C に位置する/w/が「興奮」や「動揺」の語感を持つと指摘している。確かに、日本語の「わ」ではじまる語句にはこの傾向が顕著である。たとえば、驚いたときにひとが発する「わ」や「わあ」などの感嘆詞だけでなく、副詞と動詞に限ってみても、以下のような語句がある。<sup>(14)</sup>

### [ 副詞 ]

「わあわあ」：①激しく泣く声を表す語。②やかましく騒ぐ声。また、そのさま。

「わいわい」：①大勢が口々に物を言うさま。②激しく泣く声を表す語。

「わくわく」：期待や喜びで心がはずんで落ち着かないさま。

「わさわさ」：ざわついているさま。落ち着かないさま。

「わんわん」：②人が大声で泣く声を表す語。

### [ 動詞 ]

「わく」「沸く」：⑤興奮する。



「わく」【湧く・湧く】：③感情などが生じる。

「わずらう」【煩う・患う】：①心の中で悩む。苦しむ。心配する。

「わだかまる」【蟠る】：①不平・不満などが解消されないで残る。心が晴れ  
晴れしない。

「わななく」【戦慄く】：①寒さ・恐怖・発熱などのために体が小刻みに震え  
る。おののく。

「わびしむ」【侘しむ】：①わびしがらせる。

「わびる」【侘びる】：①思いどおりにならなくて落胆する。嘆く。悲観する

「わびる」【詫びる】：相手に迷惑をかけたことをすまなく思い、許しを求め  
る。あやまる。謝罪する。

「わめく」【喚く】：大声で叫ぶ。

「わらう」【笑う・咲う】：①おかしさ・うれしさ・きまり悪さなどから、や  
さしい目付きになったり、口元をゆるめたりする。  
また、そうした気持ちで顔をくずして声を立てる。

一方、英単語にも/w/ではじまり、「興奮」や「動揺」と関連の深いものが  
数多く見受けられる。“wow”や“whoops”などの感嘆詞は言うまでもなく、  
動詞だけでも以下のような英単語が挙げられる。

waggle：よろめく／揺れる。

wail：泣き叫ぶ／激しく嘆き悲しむ。

wander：取り留めがなくなる／取り留めもないことを言う〔考える〕

warm：熱心になる／活気づく。

wave：揺り動かす／翻させる。

waver：揺れる／動揺する／ぐらつく。

weep：涙を流して嘆く〔悲しむ／喜ぶ〕

weigh：ゆううつにさせる／圧迫する。

welter : ( 快樂などに ) 𪔵たる / 𪔵ける。

wigwag : 振る / ゆれる。

wither : 元氣をなくす / しゅんとなる。

wobble : 𪔵らつく / よろめく。

wonder : けげんに思う / 疑う / 怪しむ。

worry : 心配する / 氣に病む。

wow : 大喜び [ ぞくぞく ] させる。

これらの単語例を見る限りでは、日英語ともに /w/ は確かに、浜野の言う「興奮」や「動揺」の語感を帯びていることがわかる。

上述のとおり、③はクリスマス当日の朝を迎えた「ぼく」と「彼女」のワクワク [ waku waku ] した様子 = 気持ちを伝えている。家人に早く起きてもらいたいとはやる二人の気持ち(興奮)が読者には手に取るように伝わってくる記述である。作者はこうした二人のそわそわした気持ち(興奮)を、半母音 /w/ を近い位置に配置し繰り返すことで効果的に伝えている。

## 結び

カポーティはかつてこう語ったことがある。

「私は八歳のときに文章を書き始めた。十六歳のときにはもう熟練した作家だった。私のもっとも早い時期に書かれた小説を読んでもれば、私のスタイルがほとんど変わっていないことがわかると思う。もちろん主題は変わったかもしれない。しかしスタイルは変わっていない。その理由は私の耳のせいだ。私は非常に多く耳を使って書くんだ。私は言葉のトーンに非常に熱心に耳を傾ける。私はそのことに注意深くならざるを得ない。というのも私は、言葉を、その言葉が内容にとってふさわしいかどうかよりも、むしろ単にそ

の言葉の響きがいいかどうかで使うことがあるからだ。』<sup>(15)</sup>(傍点筆者)

このようにカポーティは、「言葉のトーン」や「言葉の響き」を重視する作家であった。本稿で考察対象とした事例にも、それは表れている。/s/と/w/の押韻(頭韻)は、英文にリズムやテンポを派生させ、結果的に詩的な雰囲気を生成している。

だが、同じ事例を音象徴という観点から眺め直してみると、音象徴もまた、小説の場面の「雰囲気づくり」と詩的雰囲気の創出に寄与していることは明らかである。カポーティは本事例において読者に聖夜の「静けさ」を伝えるために、押韻という詩的技法を用いることで「静けさ」の語感を持つ/s/の子音を繰り返し、場面の静けさの雰囲気を高めている(考察1)。さらに、同じく/s/ではじまりながらも、「内部から外部へ勢いよく噴出するイメージを持つ/spl/の子音群によって、場面と時間の急展開を伝え(考察2)、「興奮」や「動揺」のイメージとつながる/w/の音象徴を用いることで、登場人物の心理状態を読者に巧く伝えている(考察3)。

カポーティの言う「言葉のトーン」や「言葉の響き」には、語根が本来的に備えている音象徴の含みがあることは明らかであろう。

## 注

- (1) 大園弘『カポーティ小説の詩的特質 音と文彩』春風社、2016. 第1章及び、「カポーティ小説における押韻形式の多様性」九州国際大学『教養研究』第23号第2巻、2016. 参照。
- (2) たとえば、篠原和子・川原繁人「音象徴の言語間比較：有声性のイメージに関する実験研究」日本認知科学会大会論文集(CD-ROM)、2009. 及び「音象徴からみる言葉の身体性」The 27<sup>th</sup> Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2013. 参照。
- (3) 大園、前掲書、pp 27-28.
- (4) デイヴィッド・クリスタル著、風間喜代三・長谷川欣佑(監訳)『言語学百科事

- 典』大修館書店、1992 . p 251 .
- (5) /w/は半母音であるため、厳密には語頭子音とは言い難いが、ここでは浜野に  
ならい、子音の範疇とした。浜野祥子『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』く  
ろしお出版、2014 . pp 36 . 参照。
- (6) 大園、前掲書、pp 29 31 .
- (7) 鈴木孝夫『鈴木孝夫言語文化学ノート』大修館書店、1998 . p 82 .
- (8) 浜野、前掲書、第2章参照。
- (9) 無声阻害音のなかでも/s/はとくに「静けさ」のイメージが強いようである。た  
えば東郷は岡倉天心の *The Book of Tea* において/s/に「静けさ」が表れている  
と述べている。東郷登志子『岡倉天心 *The Book of Tea* の多重構造と交響的音楽  
構成』五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要(11) 2005 . p 36参照。
- (10) Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House , 1948 .  
p .131 . 以下、同書からの引用の際には、引用文のあとに括弧を付しページを  
記す。
- (11) 井上恭英『英語の認知メカニズム』晃洋書房、2000 . pp 27 28 . 参照。
- (12) 大園、前掲書、p 31 .
- (13) 浜野、前掲書、p 36 .
- (14) 以下の事例は松村暎『編 大辞林』三省堂書店(1988)より引用した。語義の数字  
は原典のままである。
- (15) ローレンス・グローベル著、川本三郎訳『カポーティとの対話』文藝春秋、1988 .  
p .133 .

## 参考文献

- 井上恭英『英語の認知メカニズム』晃洋書房、2000 .
- エレナ・パンチェワ『オノマトペにおける濁音の分布と意味』千葉大学『社会文化科  
学研究』、2004 .
- 大園弘『カポーティ小説の詩的特質 音と文彩』春風社、2016 .
- 「カポーティ小説における押韻形式の多様性」九州国際大学『教養研究』第23号  
第2巻、2016 .
- 篠原和子、宇野良子編『オノマトペ研究の射程 近づく音と意味』ひつじ書房、2013 .
- 篠原和子、川原繁人『音象徴の言語間比較：有声性のイメージに関する実験研究』日  
本認知科学大会大会論文集( CD-ROM ) 2009 .
- 「音象徴からみる言葉の身体性」The 27<sup>th</sup> Annual Conference of the

- Japanese Society for Artificial Intelligence , 2013 .
- 鈴木孝夫『鈴木孝夫言語文化学ノート』大修館書店、1998 .
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ『日英語対照研究シリーズ6 オノマトペ  
形態と意味』くろしお出版、1999 .
- デイヴィッド・クリスタル著、風間喜代三、長谷川欣佑(監訳)『言語学百科事典』大  
修館書店、1992 .
- 東郷登志子「岡倉天心 *The Book of Tea* の多重構造と交響的音楽構成」五浦論叢：茨  
城大学五浦美術文化研究所紀要(11) 2005 .
- トルーマン・カポーティ *Other Voices, Other Rooms* . New York: Random House , 1948 .
- 浜野祥子『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』くろしお出版、2014 .
- 平田佐智子、浮田潤「音韻象徴・音象徴と身体性 言語認知過程研究をベースとし  
た実験的アプローチの提案」『関西学院大学「人文研究」58(2) 2008 .
- 松村明(編)『大辞林』三省堂書店、1988 .
- ロマン・ヤコブソン著、桑野隆、朝妻恵里子(編訳)『ヤコブソン・セレクション』平  
凡社、2015 .
- ロマン・ヤコブソン、リンダ・ウォー著、松本克己(訳)『言語音形論』岩波書店、1986 .
- ローレンス・グローベル著、川本三郎(訳)『カポーティとの対話』文藝春秋、1988 .
- レオナルド・ブルームフィールド著、三宅鴻、日野資純(訳)『言語』大修館書店、1965 .